

# 高山の文化を高めた人々 56

## 郷土史研究に生涯をささげた

### 岡村利平

元国府町教育長 酒井松彦

岡村利平は、国府町出身で、医師であるとともに国府村長ほか数々の公職を歴任しながら、郷土史の研究に生涯を捧げ、多くの著書を世に出した人物である。また、和歌や漢詩への造詣が深かったことでも知られている。

#### 《生い立ち》

岡村利平は、江戸時代末期の元治元年（一八六四）七月、国府戸長（村長にあたる）を務めた岡村俊平の嫡男として国府町広瀬町に生まれた。生家は、昨年まで旧国府診療所の建物が残っていた場所であつた。更地になった現在もそのことを示す石柱が立っている。利平は現高山市西町に下宿して煥章学校に通い、卒業後は地元の弘文学校に勤務した。その後、明治十五年には国府村戸長役場筆生として採用されている。



岡村利平

明治二十二年、二十五歳になった利平は高い志を持って上京し、東京医学専門学校（済世学舎）に入学することとなる。医学課程を修めた後さっそく帰郷し、明治二十六年、広瀬町において医院（内外科、眼科）を開業した。このころから、利平は多方面にわたってその才能を発揮することとなる。

開業医としての実績を重ねながら、広く地域の人々から人望を集め、明治三十二年、国府村選出の郡議会議員に当選した。その翌年には、勸業資本の貸付を行っていた飛驒国開産社から委嘱され、『飛驒史料』の編纂に関わっている。

明治三十七年には県議会議員に当選し、連続四期務めることとなる。その後、国府消防組（現消防団）の初代組頭を務め、明治四十五年には第四代国府村長（県議兼任）に就任し、大正八年十月まで二期八年間務めた。この間、陸軍中将で後に郷土史研究に打ち込んだ押上森蔵らと「飛驒史談会」を設立している。大正八年、五十六歳になった利平は、公職から身を引くときを同じくして『飛驒史料』の編纂校正に専念した。

昭和六年、岐阜県知事より自治功労者の表彰を受け、その二年後の昭和八年七月、多才かつ多彩であつた七十年の生涯を静かに終えたのである。

郷土の詩人・福田夕咲は、飛驒毎日新聞に次の哀悼

歌を寄せている。  
「たのめこし 翁もいまは世にまさで 誰にたづねむ 斐太のあるごと」

#### 《岡村文庫『飛驒史料』》

利平が所蔵していた約千冊の書籍のほか、石器、土器、古瓦などの貴重な資料は、昭和十三年、建坪約四坪の土蔵とともに、遺族から国府村に寄贈された。

寄贈された数々の資料の中で特筆すべきは、利平自身が編纂した『飛驒史料』である。ここには、東京大学史料編纂室へ長年にわたって出入りして調査・研究した内容や、陣屋ほか旧家等から収集した膨大な資料に基づく考証史料が収められている。先史時代から明治二十二年の町村制発布まで、国府に留まらず飛驒全域に関するさまざまな史実等が毛筆で事細かに書かれており、約四万枚に及ぶ大著である。歴史的・文化的な価値も非常に高く、飛驒地域にとって貴重な宝と言えよう。

大正十年には、『飛驒史料』を抜粋要約した『飛驒編年史要』が利平の手によって発刊された。その的確かつ正確な考証内容は、後世の歴史研究者から高く評価され、数多く引用されている。

また、昭和二年には、幕末の元治元年（一八六四）から慶応四年・明治元年（一八六八）までの五年分について、『飛驒史料維新前後之一』として出版されている。

『飛驒史料』は、学術的にも極めて貴重な歴史資料であることから、昨年度、高山市によって専門的な保存処理が



岡村文庫が収められていた土蔵

施された。また、記述されている内容を学習・研究したいという希望が多いことから、現在、デジタルデータおよび複製本の作成に向けた準備が進められている。

#### 《岡村利平顕彰碑》

利平の多大な功績を顕彰するため、昭和四十三年十一月、明治百年記念事業として「岡村利平顕彰碑」が、国府町の広瀬神社境内に建立された。

また、平成五年八月には、国府史学会主催による没後六十年祭が厳かに斎行された。当日は多くの関係者が偉業を偲んだ後、石原哲弥高山市教育長（当時）より利平の事績について講演が行われている。

今年には利平が没してから八十年、来年は生誕百五十年の記念の年である。利平が残した偉大な業績は、今なお敬仰してやまないとあつてゐる。



顕彰碑（広瀬神社）